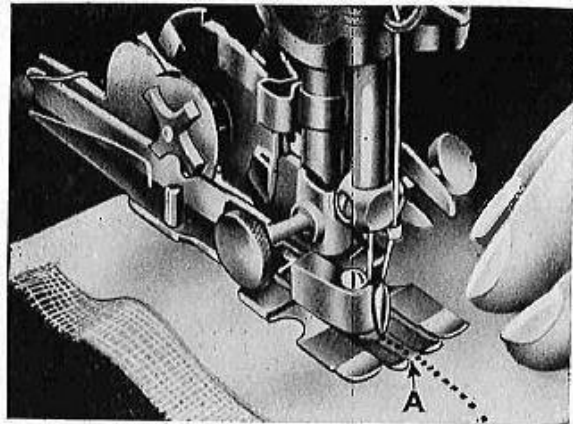


# シンガーヘム縫及びピコ縫附属具使用法 (附属具一册番號) (二二二二六三號)



第二百圖 附属具使用の圖

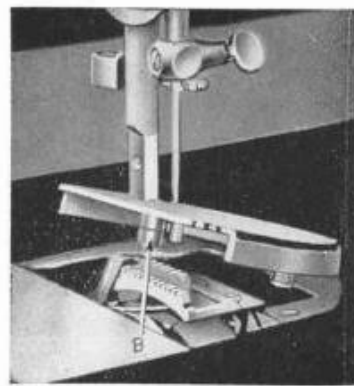
此附属具は家庭用本縫ミシンで優れて美事なヘム縫やピコ縫を作ります。之は附属具と共に供給される特別長い大螺旋で、ミシンの押へ棒へ普通の押へ金の代りに造作なく取付けられます。そして附属具と共に供給される特殊の喉板を普通の喉板に代用するのであります。

ミシンから喉板を取り其場所へ此特殊の喉板を取付けます。夫には特殊の喉板の第二一圖Bの金を一方の螺旋穴に差込み喉板の螺旋の一ツで締め付けるのであります。

針、十一番か十四番の新しい針をミシンに取付けます。之は曲つたり又は先端の鈍くなつた針では申分のないヘム縫やピコ縫が出来ぬからであります。

喉板に対する針の位置を定むる事 針は其先端が喉板の針穴の殆んど中央(前後の)に位する様針棒へしつかり取付ける事が肝要であります。

此加減をするにはハズミ車を廻して針を針穴に通し、そこで針留の螺旋を少し緩めますと、針を針穴の前後の殆んど真中に正しく置く事が出来ます。そして針留に出来るだけ深く入つて居るかを確かめ其螺旋を堅く締めるのであります。

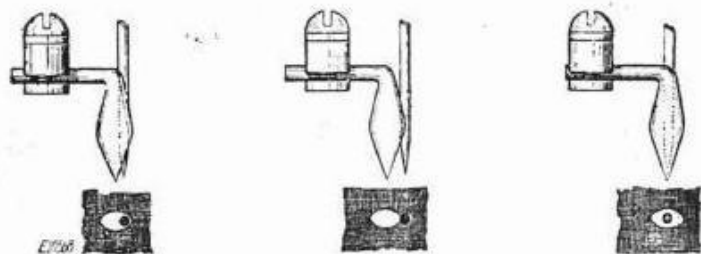


第二一圖 特殊の喉板を込む圖

## 附属具の取付け方

附属具を手持ち其運轉杆第二二圖Fを上下に動かして第二二圖に示す如く穴開け金(第二二圖G)を最高部に上げます。さうすると歯止め(第二二圖H)は齒の星印のある一ヶ所で止まります。

次にミシンから押へ金と其螺旋とを取外します。そして此附属具を押へ棒の背面から差入れ、運轉杆の又へ第二三圖F)をミシンの針金に跨らし、特別の大螺旋(第二三圖J)を挿入れネヂ廻して堅く緊めます。それから押へ棒を下げながら穴開け金(第二三圖G)を此喉板の穴へ下げますが、穴開け金は喉板に觸れ又は摩れてはなりません。此金は運



正

不正

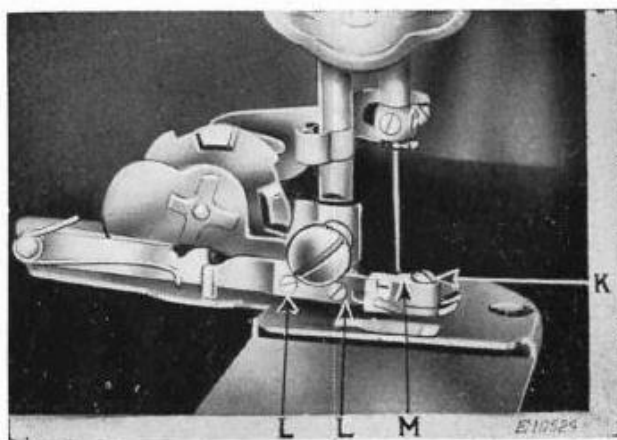
不正

圖四百二第

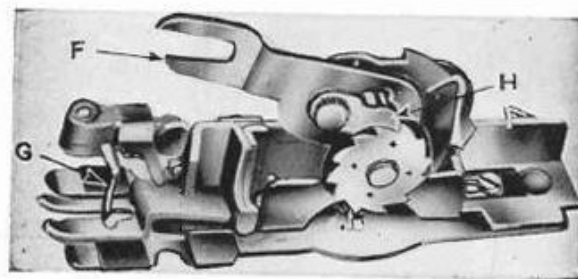
穴開け金の正しき位置、針は切地の端を引掛すに開けられた穴の右端に下りま

之は穴開け金が餘り左方に寄つて居りますから針は穴を外れ切地を貫きます

之は穴開け金が餘り右方にある爲横線が完全に出来ず開けられた穴が小さくなります



減加の金け開穴 圖五百二第



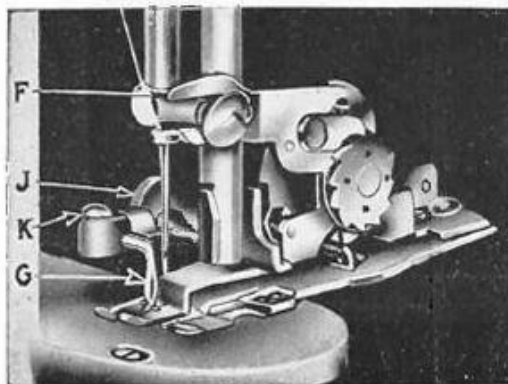
圖二百二第  
意用るけ付取を具屬附

轉中常に喉板の穴を自由に上下する様注意せねばなりません。穴開け金が附屬具に正しく取付けられてあれば何の加減もする必要はありませんが、萬一加減する必要ある場合には次の圖を御參考下さい。針との關係を正しくする爲穴開け金を右又は左へ加減するには 押へ金を下し二百五圖Kの螺旋を緩め、穴開け金を右又は左へ動かし、そして其螺旋を強く締めます。

喉板の穴の前後に穴開け金を加減するには 押へ棒を下げ二百五圖Lの二ツの螺旋を緩め、穴開け金を望みの方向に動かし、そして其螺旋を強く緊めます。

夫等の螺旋を締める前に、穴開け金を喉板の穴へ下げて置いて加減すると正確に出来ます。

注意 此附屬具を十五種三十型又は百〇一種ミシンに使用する時には、押へ棒を上げてある時にハズミ車を廻してはなりません。それでない針棒で動かす二百五圖Mの突出した金が附屬具の脚に突き當り損じる事があります。



圖るたけ付取を具屬附 圖三百三第

## 準備

カタン及び絹糸 糸はへム縫をする材料に最も適當なものを使ふ事が肝要で、八十番乃至百番は大抵の材料に適當です。絹なれば糸を使はねばなりません。

送り 縫目加減器を調節して、ミシンの送りを中立、即ち前にも後にも送らぬ點に加減します。

押へ棒 押へ棒の壓力は普通の裁縫の時よりも少し強くして置きます。

注油 此附屬具の重なる回轉部分へ時々油一滴宛注して下さい。

## 附屬具の使用法

附屬具の下へ仕事を置く前、并に附屬具から仕事を取外す前には、常にミシンのハズミ車を廻して、針と穴開け金を必ず切地から上げて置かねばなりません。

切地に皺をよせてはなりません 若し切地に皺があるか又は折れた所がある様なれば、へム縫や、ピコ縫をする前に十分平らに壓して置く必要があります。

縫方 ピコ縫の場合には、材料の切去る方の端を左側にして、此附屬具で一度だけ縫へばよいのであります。併しへム縫の場合には、此附屬具で二度縫はねばなりません。其二度目の縫目は、第一の縫目の列とは穴の反対の側へ縫ふのであ

ります。言ひ換へれば二度目の縫目は第一の縫目の列を縫つた終りから縫始めるのであります。二度目に縫ふ時には、最初縫つた時に出来た同じ穴へ、穴開け金が入り入れねばなりません。之が爲には縫ふ手元を明るくして置く必要があります。調子 時としては普通の裁縫の調子よりは幾つた加減にせねばならぬ事がありますが、之は實地に試みられると一番よく加減が定められます。

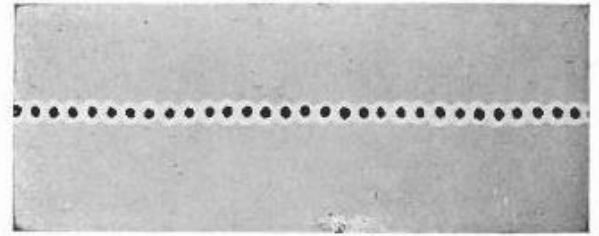
ターラタン (薄紗)の裏あて 此附屬具を使ふ時に、切地の下にターラタンを當てるに宜しう御座います。若し切地が薄つべらなものなら是非其必要があります。ターラタンは百貨店や呉服屋で求められますが、一番薄いのが適當です。併し厚いのも使へます。ターラタンを板に細長く切つて、へム縫又はピコ縫をする箇所の下へくけ付けて置きます。そして縫上げましたら一方の縫目の筋の側でターラタンを切去り、他の縫目の側から引抜けばよいのであります。

練習 衣類其他の仕事を始めます前に、夫と同じ材料の切端で、此附屬具の使ひ方やミシンの調子の加減を練習して下さい、ミシンは常に徐々又一様の速度で運轉せねばなりません。

## へム縫

へム縫をするには第二百六圖に示す如く二列の縫目が入用であります。第一列の縫目を作り上げ、第二列を縫ひ始める前には常に仕事を平にし、又調子の加減で少し詰まつて居る所があるかも知れませんから、第一列の縫目の筋を少し引張つて置きます。二度目の時に始めの穴を正しくたどつて行ける様にして置きます。

二度目の縫目 二度目に縫ふ時には縫ひ出しを正確にせねばなりません。それには穴開け金を食指で押し、最初の縫目



縫ムへ 圖六百二第

折つた縁のへム縫

出来た穴の真中へ入れ、其儘穴開け金を壓へて居てそろくと押へ棒を下げて出します。

仕事の導き方 第一の縫目の列の位置に注意し、特に其左手の方即ち球になつた縁が附屬具の脚の割目(第二百圖A)のどの邊に来るかを注意し、そしてミシンを運轉する時に、脚と縁との釣合を外さぬ様、最初の縫目の筋を少しづつ右か左に導きますが、仕事を手元へ引張つてはなりません、さうすると附屬具の運動を妨げます。

脱線させぬ事 穴開け金は常に、已に開けられてある各穴の真中に、其先端が入込む様注意せねばなりません。若し穴の真中へ入らぬ様なら、ミシンを止め押へ棒を上げ、穴開け金を手で押して、穴の中央に来る様少しく仕事を動かして、穴開け金を手で壓へた儘押へ棒を下し仕事を續けるのであります。

第二百七圖の如く折つた縁のへム縫をするには、縁を折りアイロンで平らに壓へ、縫ふ時には穴開け金が入り、折つた縁の側で切地の一重の所へ穴を作り、縫目が折つた端を捉へて行く加減に切地を導かねばなりません。

ピコ縫

ピコ縫仕上げ 之は單に、第二百八圖に示す如く一列の縫目を作りましたら切地の縫つてない方を穴の端の所から切り取ります。するとピコ縫が出来上ります。

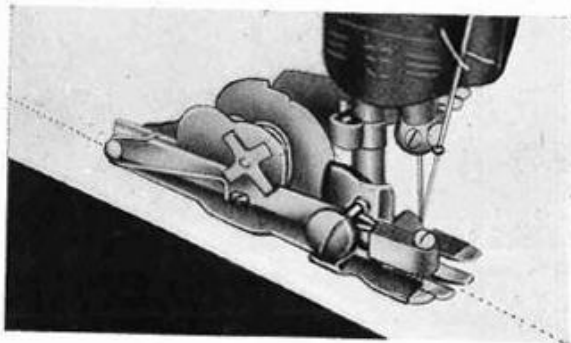
此附屬具で色々の裝飾縫や縫付け模様を作る事が出来ます。

裝飾縫

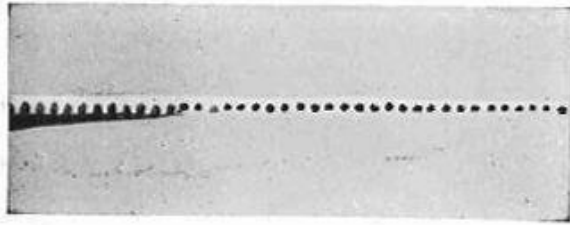
此附屬具で美しい裝飾縫が出来ます。夫には第二百三圖Kの螺旋を緩め、Gの穴開け金を取外します。そして生地に適當した對照色の糸糸で模様を縫つて行けばよろしいのであります。

縫付け模様

之も亦普通には、下地の切地と對照する色の切地を、下地の上に縫付けます。附屬具はへム縫の場合と同様、穴開け金を付けた儘使用します。模様は最初に下地へ假縫して置きへム縫を済ませたら模様の縫端は穴の筋の所から注意して切り取ります。



縫ムへの縁たつ折 圖七百二第



縫コピ 圖八百二第